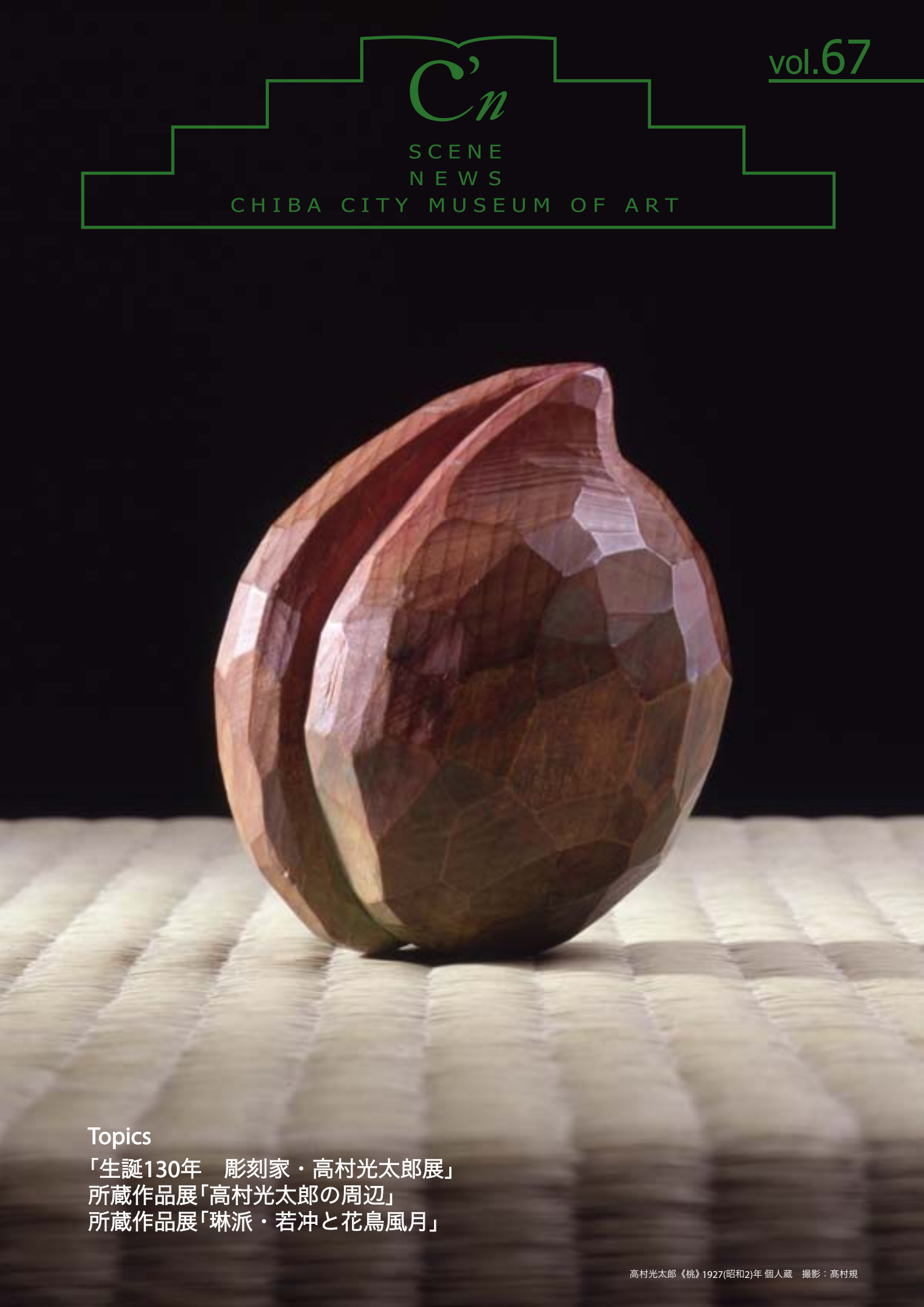
C'n

SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol.67



Topics

「生誕130年　彫刻家・高村光太郎展」
所蔵作品展「高村光太郎の周辺」
所蔵作品展「琳派・若冲と花鳥風月」

高村光太郎《桃》1927(昭和2)年 個人蔵　撮影：高村規

館長のつれづれだより ～仏像半島、そして今後の展示～

「仏像半島―房総の美しき仏たち－」展には、多くの方がご来館下さり、ご好評をいただくなかで会期を終了しました。この展覧会の開催にあたり、ご指導、ご支援、ご協力をたまわった方々、また、ご観覧くださった皆様に対して、まずはお礼申し上げます。

「驚いた」「すごい迫力だ」「びっくり」「すばらしい」「感動的だ」「ありがたいお姿」など、会場ではそんな言葉の行き交うのをしばしば耳にしました。像に向かって手を合わせる人。「千葉にこんな立派な仏像があったのか、知らなかった」と率直な感想を述べてくださる方。そうした声を聞くたびに、わたしたち千葉市美術館に働く者は、力付けられ、この展覧会を開催したことの意義を感じざるを得ませんでした。ありがたいことです。

展覧会にお出ましいただいた尊い門外不出の仏様たち。その多くの仏様を、お寺さまのお堂のなかで拝むのではなく、美術館という、いわば異空間の中で接すること、仮に同じように拝むという心があったとしても、そこには大きな違いがあるといえるでしょう。仏像を歴史的な視点から一つの文化遺産として、あるいは造形芸術作品として美術史的な観点から捉えようとするのでは、おのずと別な意味が生じるのは言うまでもありません。従って、そのことをいかに理解し、解釈を加え、表現するかは美術館に働く人間にとって、真剣かつ慎重に取り組むべき課題なのです。

仏像のもつ尊厳さを損なわずに、美術館の展示室に仏像を展示し、ご来館のみなさんに、そのすばらしさを味わい、美術館での鑑賞を楽しんでいただく。そのためにはどうすれば良いのか、展覧会を担当する学芸員たちは、時間をかけて思案・工夫するのです。今回の展示では、仏様の世界を展示のなかで如何に表現するかを考えました。その一つに、仏像を単体として展示するのではなく、さまざまな役割を持つ仏像たちを、例えば薬師如来なら、その世界を守る眷族である十二神将と、また十一面千手観音様なら二十八部衆というように、それぞれの仏の世界を構成する仏様たちを、一つの集まり、ないしは群れ、あるいは像と像の組み合わせとして見せる構成を試みています。

次々と現れる仏像の群れ、そこに圧倒的な迫力を感じられ方も少なくないと思います。像の間から別の幾つかの像が見え隠れし、歩きながら角度をかえて眺めると、また違った姿や景色が見えてきます。変化に富んだ造形の面白さを、鑑賞者は体験することが出来るでしょう。現代美術でいうところの、インスタレーション的な効果をもつ造形世界がまさに展開されているかのようにさえわたしには思えました。

房総半島は思った通り、いわば仏像の宝庫でした。洗練された都風の仏様と異なる、地方仏の持つ独特の力強さや個性豊かな造形表現に大きな魅力を感じた方も多いでしょう。

今回は仏像を展示するという、当館では珍しい機会でしたが、わたしたちは、仏像に限らずどの展覧会でも常に優れた造形芸術作品を、ご覧くださる方々に如何に見ていただけるかに心を配り、作品の待つ特徴やそこに潜む魅力をさまざまな角度から引き出し、有体に言えば切り口を変えながら、こんな発見があった、こんな面白いことが分かったぞ、と入館者の皆さんに思ってお帰りいただけるよう努力を続けております。

6月29日から当館では「生誕130年　彫刻家・高村光太郎展」を開催します。高村光太郎（1883-1956）は、木彫家として知られる高村光雲（1853-1934）の長男として生まれ、父から江戸時代そのままの指導法によって木彫の基礎を学びました。のち東京美術学校で木彫のほか塑像を学び、卒業後アメリカそしてフランスに留学し、特にロダンに学ぶことで、近代西洋彫刻の本質をしかりと理解したという点で同時期の荻原守衛衛と双璧といえるでしょう。光太郎は文筆家としても知られ、詩集『智恵子抄』は特に著名です。今回の展覧会では、妻・智恵子が制作した紙絵も合わせて展示します。担当学芸員は「本展が光太郎の彫刻作品を見直すきっかけになるとともに、今日活発化している近代日本彫刻をめぐる研究に対する反省の機会となることを願います」と大変に意欲的です。是非ご来館いただき、光太郎や智恵子の作品の数々を皆様方の目で確かめ、造形の美をお楽しみください。

さらに、8月27日から9月23日までは「琳派・若冲と花鳥風月」展を開催します。花鳥風月とは、担当学芸員が「自然の美しさであり、美しい自然を愛する文化です」と述べるように、日本人の美意識を論ずるときにもよく使われる言葉です。本展は、本館所蔵およびご寄託いただいている作品から琳派や若冲の作品を中心に展示のテーマを七章にわけ、その美的特徴や作品の魅力を引き出す展示とすることを目指しています。花鳥風月という語は、もはや古びたものでは決してなく、現代にも生きています。あなたご自身の花鳥風月、すなわち、美しい自然を愛する日本文化の泉源を、伊藤若冲や江戸琳派の作品などを通して発見してください。

「市民とともに生き、美術館は成長するもの」という先人の言葉があります。どうぞ美術館を存分にご活用下さるとともに、さらなるご支援をお願いする次第です。

［館長　河合正朝］

（上）「仏像半島」展での展示室の様子

高村光太郎 彫刻家 生誕130年 展

高村光太郎《蟬 3》1924(大正13)年　個人蔵　撮影：高村規

冒頭からいきなり関係ない話題を持ち出すようで恐縮だが、彫刻家である土谷武氏の生前、こんな話をうかがったことがある。

氏がパリに留学中のこと、グランド・ショミエールでデッサン中、他国の留学生からお前のデッサンはヘンリー・ムアだ、何で自分のデッサンをしない、と忠告された。そんな、こちらはムアを真似したつもりで描いていたわけではないんですがね—　つまり、日本にいる時にはそれがいいデッサンのやり方だと思っていたものが、人まねでしかなかったということでずいぶん悩んだ、という話だった。その場に今回の光太郎展を最初に企画した川上直也氏も一緒にいて、土谷氏のご自宅の帰り、二人で夏目漱石の留学話みたいだと話し合って経堂の駅まで歩いたことを思い出す。もうずいぶん前のことになる。

今から考えてみれば、相手がおなじ留学生だったからよかったのだ。たとえばこれが日本から彫刻をパリに持ち込んで展覧会を開き、現地の人間からロダン以上にロダン的だと言われれば、持ち込んだ方は賞賛されたと思うし、日本の関係者は帰国後その言葉を凱旋展のチラシなどに書き込み、それが国内に広まる。美術館でその彫刻家の展覧会を開催しようとすれば、美術館を管轄している役所なり会社に学芸員が出向き、この彫刻家さんはパリでロダン以上にロダン的だと評価されましてと紹介し、ギャラリートークを行えば学芸員は来館者を前にしてロダン以上にロダン的をくりかえす。学芸員ばかりではない。新聞だろうがテレビであろうがそう伝えるはずである。

高村光太郎がその昔ロダンの言葉を雑誌や研究書から集めて翻訳し、正続二冊の本を出した。彼はロダンの言葉のなかに父の光雲が言っていたことと共通したものを見つけ、その受容には問題をかかえながらも結果的にそれは彼にとって制作上のこころがまえの根本につながっていた。ところが、その本を手に取った美術学校や大学の彫刻科の学生たち —ある時期までみなが愛読したというけれど— にとってはその本があたかも受験参考書のように受け入れられた。つまりつづめて言ってしまえば、光太郎が翻訳したその本を読んで勉強するとロダンのような彫刻をつくることができると誤解したのだった。たしかに、光太郎の翻訳はロダン芸術のエッセンスをみごとにとらえたものだった。だからロダン以上にロダン的と言われれば、それは合格証書をもらったようなものと勘違いしてもしかたがない。がんばりましたね、お父さん、である。

これは、自分たちの国が近代化に遅れているという危機意識がもたらしたものであって、政治や軍事からはじまり光太郎の彫刻のような文化面にいたるまで、自分がその分野で日本を牽引していかねばならないと考えた留学生たちにとってそれが彼らの使命だったわけで、それをわらうわけにはいかない。

しかし、光太郎の場合不思議なことに、留学の動機が同じ時期の日本人とはいくぶん違っていて、この国の近代化とはまるで関係のないような気分がどこかで作用している。もともと本人は気乗りがしなかったと言っているのだから動機などないにひとしい。これは、本人が書き残した文章や手紙にはっきり書かれているわけではないのだけれど、周囲からすすめられて留学に向かう彼の心情には、職人としてそろそろひとり立ちする時期を迎えた若者が、長いこと世話になった親方から離れて、ほかの親方の仕事ぶりを見に行く—　そんな気分が感じられる。

日本にいた時からロダンの作品に興味を持ちながら、フランスに渡った時彼に師事どころかまともに会おうともしなかった理由について、光太郎は江戸っ子の照れみたいなものだ、と語っているがそれだけではあるまい。いや、この発言じたいが照れにほかならない。留学した彼はロダンの実作にさんざん接して、「見切った」のだ。これだな、とか、まあこんなものか、という思い。ロダンという人間を学ぶわけではない。親父と一緒だということがわかったらそれで充分。問題は、気に入った(あるいは気になった)作品がどのようなたちによって作られているかであって、それは本人に会わずとも作品を見ればだいたいのことはわかるから自習で何とかなる。だいたい、親父からも手取り足取り指導されたわけではない。「習うより慣れろ」で育ったのだから。

光太郎の文章を読むときに圧倒される思いがするのは、自分が幼いころから身につけてきた彫刻をつくるわざに、絶対的といっていいほどまでの自信と信頼を寄せている点である。光太郎の芸術論といえば「緑色の太陽」が有名だが、これは絵画という他家のことがらについて記したものであるということを良く頭に入れて読まないと、勘違いして火傷する。芸術作品というものは自由な思いによって作られるべきだ、そう主張する彼が、こと彫刻にかんしては徹底した技術の徒であって、技術なき輩は去れといわんばかりである。下手でも思いがこもっていればいい、みんな仲良く一等賞などという言葉は逆立ちしてもみつからない。帰国後、はたから見ればわがままのし放題であった彼の頭を彫刻の分野でおさえつける人物が出てこなかったのもこのためで、光雲の子どもだからとか、洋行帰りというだけが理由ではない。門下の重鎮たちが敵わないだけの力量を光太郎がすでに持っていることをみながうすうす感じていたからである。困った若者ではあるけども、自分たちの技量もとうに見透かされているのだから文句のいいようがない。

ここでもういちど土谷氏の思い出を印たい。氏はもともと京都の有名な窯元の長男として育った。子供のころの遊び場は工房であって、おおぜいの職人が轆轤(ろくろ)をひいているのを見ているうちに、

誰が上手で誰が下手な轆轤なのかがおのずとわかるようになったという。おそらく、親のなにげない一言、職人どうしの話や舌打ちなども耳に入ったにちがいない。しかしそんな耳から入る情報よりも、轆轤の回転によって変わっていく土の動きを見ているうちに巧拙がわかるようになったのであって、そういうことが「わかる」時期が子供の時分にはあるということだった。光太郎もそのようにして家業が「わかる」ようになったことはみずから繰り返し語っている。彼にとってその経験は文字通り一生の宝物だった。

高村光太郎《手》1918(大正7)年頃　個人蔵　撮影：髙村規

この光雲から受け継いだ技術なり、あるいは自家の工房でつちかわれた彫刻を見る（この場合「読む」でもいい）能力は、東京美術学校教授への就任をはじめとする父の栄達によって「お上」も認めたものとなっていた。もし光太郎が地方仏師の子として生まれていたら、どうだったろうか。かつて司馬遼太郎が、五条坂に生まれ育った八木一夫が地方に生まれていたらと自問して、「つぶされるか、天狗でおわるか」と記したことがあった。それと同じだろう。そうならずに運良く官展か在野で活躍することができたとしても、主流からは遠ざけられていたにちがいない。光太郎が官展に出品をしなかった理由は自分よりも技量が劣る連中の審査を受けることが耐えられなかったからであって、これは「お上」も認めた自家の技術に誰がどの資格によって優劣をつけるのか、というところに行き着く。聖徳太子奉賛会の展覧会に出品するようになった理由について、彼が「父もすすめたし、総裁が宮様だったから」だと語っているのは弁解でもなんでもない。国が認めた光雲の技術を受け継ぐ長男としては出すのが当然だった。この展覧会はいわば御前試合である。そうであれば出品しないわけにはいかない。

ここまで文章をつづりながらわたしが思うのは、なにも自分でそこまできゅうくつに、間口をせばめなくても良かったのではないかということだ。これまでさんざん語られてきた、光雲がふるい時代の代表で、光太郎が新しい時代の旗手、という対比は分かりやすいが、わたしたちはひょっとしたらかんじんなところを見ていなかったのではないか。

気に入らない仕事は受けない、いやなものはいやだ。それは芸術家のエゴやわがままというよりも、意固地で気が利かない職人気質と言ってしまった方がすっきりする。むしろ、「御一新」後に生まれたがために、より一層そうあらねばならないと倫理的に自分を追い込んでいたとしたら、どうだろうか。

わたしたちは彫刻家・光太郎を見誤っていた。

［学芸係長　藁科英也］

毛利教武《手》1919(大正8)年　個人蔵

関連イベント

■記念講演会「ひとすじの道—光太郎研究を回顧して一」
講師：北川太一（文芸評論家／高村光太郎記念会事務局長）
7月7日（日）14：00より／11階講堂にて／定員150名／聴講無料
※往復ハガキによる申込制／6月26日（水）必着
※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■ファミリー・プログラム「はさみで描こう」
きれいな色紙を使って夏の絵をつくります。
7月28日（日）13：30〜16：00／11階講堂にて
対象：小学1〜3年生の子どもとその保護者10組20人
参加費：500円／組
※往復ハガキによる申込制／7月16日（火）必着
※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■中学生のためのギャラリークルーズ'13
子どもだけでの来館と鑑賞をサポートします。受付順に随時グループを組み、ボランティアリーダーと「高村光太郎展」を鑑賞します。7月26日（金）、27日（土）10：00〜15：00随時受付／展示室にて
定員：各日30名程度／参加無料

■市民美術講座「光太郎・そのあゆみ」
7月20日（土）14：00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料
講師：藁科英也（当館学芸係長）

■市民美術講座「光太郎・その時代」
8月10日（土）14：00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料
講師：藁科英也（当館学芸係長）

生誕130年　彫刻家・高村光太郎 展

2013年6月29日(土)▷8月18日(日)
［休館日］　7月1日（月）、8月5日（月）
［観覧料］　一般 1000（800）円、大学生 700（560）円
※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※（　）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金
※前売券はローソンチケット（Lコード：38378）、セブンイレブン（セブンコード：023-178）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（8月18日まで）にて販売

高村光太郎の周辺

これも、土谷武氏にからむできごとからはじまる。

1998年9月、東京国立近代美術館で土谷氏の回顧展が開催された。その開会式に出席した時、美術館1階の自動ドアを開けると、柳原義達氏が立っていた。

――…さん、よく来てくれました。

柳原氏は美術館にやって来たひとりひとりに、あの背の高い(戦前の生まれにしては、とても高かった)体を折り、丁寧な挨拶をされていた。たしか氏はこの年米寿だったはずで、心配した美術館の人が氏の横に椅子を置いていたような記憶がある。みずからの彫刻を具象から抽象に転じさせた土谷氏をいち早く認め、応援し続けた柳原氏らしい姿だった。

この時、わたしは久しぶりに氏とお会いした。

挨拶をしたあとで、以前から気になる質問をした。

1952年、高村光太郎は十和田湖畔の裸婦像制作のために岩手から東京に戻った。さいわい、50年から56年までの日記が残されているために、この塑像制作の経過はよくわかる。そして同時に、誰がいつ制作中の彫刻家と会ったか、アトリエを訪問したのかも子細に記録されている点でも興味深い記録となっている。

―― 柳原先生は、東京に戻られた光太郎にお会いになられなかったのですか。日記にお名前がなかったので、気になっていたんですが。

咄嗟に驚き、一瞬そり返ったような姿勢になった氏は、

―― そんなことはありません！ ぼくは難波田(龍起)君と一緒に何度か行った。

この柳原氏のひとことが、わたしにとって光太郎という彫刻家の実像となった。

ところが昨日、光太郎展のために入手した古い資料のなかに、氏の次のような文章があった。

…私が戦争に依つて遠ざかり、しかも岩手の山から下りて中野の中西さんのアトリエに移られてから、私と共に暮した小坂圭二君が先生のお手伝いに通うようになつてからも、私は御礼を兼ねてお訪ねしなければならないと思い乍ら、自分の仕事の拙さを思い、つい足は遠ざかつてしまった[1]。…　　(「あの窓口」)

柳原義達《猫》1964(昭和39)年

さてどちらが正しいのか。わたしにとって、眼の前で反射的に思い出を語られた氏の姿はとてつもなく強い。

先週、光太郎展の出品作品拝借のために毛利教武のご遺族をおたずねした。

毛利は光雲門下で、1911年の「白樺主催 洋畫展覽會」に戸張孤雁、荻原守衛(遺作)とともに彫刻を出品しており、翌年の「第一回ヒユウザン会展覧会」でも彫刻を出品している(この時、光太郎も参加しているが、油彩画の出品だった)。ただし光太郎同様、45年の空襲によって彼の主だった作品はほとんど喪われてしまった。

ご遺族のおはなしでは、光太郎と毛利家とは戦前からよく行き来があったとのことだが、さてそのような記録は光太郎からは今日まで見出すことができない。光太郎が記した戦後の日記に教武の名前がしるされているのは2回であり、1954年2月16日のくだりに、

… 清水多嘉示氏、毛利武士夫氏同道くる (原文のまま)[2]、

とあるのが教武の次男でやはり彫刻家である毛利武士郎のことだろう。

あの大部な光太郎全集のなかに、毛利家のひとびとはほとんどあらわれない。

1)草野心平(編)『光太郎と智惠子』筑摩書房　1959年　p.164
2)北川太一(編)『増補版　高村光太郎全集　第十三巻』筑摩書房　1995年　p.179

［学芸係長　藁科英也］

毛利武士郎《手の中の眼》1956(昭和31)年

同時開催　**所蔵作品展　高村光太郎の周辺**

［観覧料］　一般 200(160)円、大学生 150(120)円
※(　)内は団体30名以上
※ 千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※「彫刻家・高村光太郎展」ご観覧の方は無料

所蔵作品展

琳派・若冲と花鳥風月

Beauties of Nature — Rimpa, Jakuchu and Japanese Painting

（図1）森寛斎《四季花鳥図屏風》幕末～明治時代

花鳥風月とは自然の美しさであり、美しい自然を愛する日本の文化です。美術は花鳥風月をかたちに表してきました。本展覧会は千葉市美術館のコレクションから花鳥風月を題材とした絵画を展示します。

第一章「四季」：めぐる季節の中で育まれる花鳥風月は四季の象徴です。松本山雪《瀟湘八景図屏風》は中国江南地方の景色によって四季と時間の推移を描きます。四季の植物、鳥を連続した画面に描く森寛斎《四季花鳥図屏風》（図1）には循環して連続する時間を表す東洋絵画の伝統を見ることができます。鈴木其一《芒野図屏風》は一面の芒で秋の季節感を伝えます。

第二章「花」・第三章「鳥」：花は植物全般、鳥は動物全般を指し、花鳥は生命を象徴します。牡丹＝富貴、白頭翁＝長生きのようなおめでたい意味合いを含む花鳥画は、場を華やかに飾ってきました。日本美術の装飾性をよく表す琳派や伊藤若冲は、花鳥画に多くの優品を残しています。草虫画の名手紅白川の筆意に倣ったという、狩野栄信（ながのぶ）《草虫図》（図2）は花鳥よりもミクロな自然の縮図である草花、虫を描いたもの。中国北宋の徽宗皇帝時代に宮廷に所蔵されていた絵画の目録『宣和画譜』の蔬果門に「薬品、草虫」の項目があり、「草虫」の画題は早くに成立していました。中国の草虫画は琳派、若冲の作品にも影響を与えています。松村景文《秋草図》（図3）は、優美さ、繊細さ、物悲しさを合わせた「もののあはれ」と結びつく秋草を主題としています。鳥については、豪華な姿が好まれた孔雀、武士の権力の象徴であった鷹、水辺の身近な鳥であり路と音が通じることから中国で「一路功名」の吉祥画題となった鷺、若冲が観察して繰り返し描いた鶏、異国の珍しい鳥の鸚鵡、長生きの象徴である鶴などを取り上げます。江戸時代以来の浮世絵版画の技術を用いて明治期に出版された小原古邨の花鳥版画は西洋的な画風で伝統的な画題を描いています。

第四章「風月」：花鳥に対して風月は天候、自然現象と捉えることができます。花鳥風月と同様四季の自然美を表す雪月花ということばもありました。ここでは雨、雪、月、水を描き出した作品を取り上げます。宋紫石《雨中軍鶏図》（図4）は雨風に負けず立つ軍鶏を描いた作品で、胸の青色は雨に濡れていっそう鮮やかさを増しているようです。岸駒《鶴図》は雪と鶴の体の白さが印象的な作品。伊藤若冲《月夜白梅図》には満月と月光を反射する水の流れが描かれています。

（図2）狩野栄信《草虫図》
文化・文政年間(1804-30)頃

（図3）松村景文《秋草図》文政・天保年間(1818-44)頃

（図4）宋紫石《雨中軍鶏図》
明和8年(1771)　個人蔵

第五章「山水」：山水に象徴される宇宙の中に花鳥風月はあり、人の営みもありました。中国文化を規範とした日本では山水画も中国風に描かれました。日本の実景である京都から大坂への淀川下りを表す伊藤若冲『乗興舟』(図5)にも中国趣味が伺えます。

第六章「人物」：花鳥風月をめでるのは人間です。鈴木其一《桜町中納言図》(図6)に描かれた桜町中納言こと藤原成範(しげのり)は邸内に桜を植えてめでました。物語絵と花鳥図を組み合わせた田中抱二《伊勢物語四季花鳥図》(図7)に見るように、琳派の画家は物語を主題とした人物画も多く残しています。

第七章「琳派の版本」：主に花鳥風月を題材とした琳派の版本を紹介します。尾形光琳の画風を慕い、酒井抱一の活動と同じ頃出版された中村芳中『光琳画譜』(図8)には“ゆるかわ”な世界が広がっています。明治末にも琳派の画風をモダンにアレンジした神坂雪佳『百々世草』(図9)、若冲の版本との関連も伺わせる古谷紅麟『こうりん模様』などが出版され、琳派の画風は長く愛され続けました。

「花鳥風月」の語は現代日本にも生きています。スピッツのB面を集めたアルバム名、一世風靡セピア(少し古いですか)、ケツメイシ、Metis、レミオロメン、森山直太朗、SEKAI NO OWARIらの曲のタイトルになっています。ボーイズラブの漫画、麻雀ゲームのサイトにもあるようですし、「花鳥風月」という飲食店も何軒かあります。この展覧会をあなたのお気に入りの花鳥風月に加えていただければうれしいです。

［学芸員　伊藤紫織］

関連イベント

■市民美術講座「日本絵画の花鳥風月」
9月7日(土)14:00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料
講師：伊藤紫織(当館学芸員)

所蔵作品展　**琳派・若冲と花鳥風月**

2013年8月27日(火)▷9月23日(月・祝)
［休館日］　9月2日(月)
［観覧料］　一般 200(160)円、大学生 150(120)円
※(　)内は団体30名以上
※ 千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

(図5) 伊藤若冲『乗興舟』(部分) 明和4年(1767)頃

(図6) 鈴木其一《桜町中納言図》
天保年間(1830-44)頃

(図7) 田中抱二《伊勢物語四季花鳥図》より　江戸時代後期

(図8) 中村芳中『光琳画譜』より
享和2年 (1802)刊

(図9) 神坂雪佳『百々世草』より
明治42-43年(1909-10)刊

6月16日まで開催した「仏像半島—房総の美しき仏たち」は大変ご好評をいただき、たくさんのご来場がありました。なかでも、ほぼ毎週のように行った関連イベントは毎回満員となりました。イベントごとにご来館いただいた方も少なくなかったかと思います。そんなイベントの様子をこちらで一部ご報告させていただきます。

声明は4公演行いました。天台宗、真言宗それぞれでまったく異なる趣きの声明でした。天台宗は鳴り物が控えめ、真言宗は華やかという印象でしたが、各出演団体とも今回の公演のために工夫を凝らされ、例えば2階から散華をまいて立体的な空間を演出されたり、和太鼓や中国琵琶、二胡との特別なコラボレ—ションを披露してくださいました。会場であるさや堂ホールと声明が融合し、荘厳な空間となりました。さや堂ホールはイベント期間以外はカフェとして営業。普段ホールに入ったことがない方も入りやすく、その空間を楽しんでいただけたようです。

また、仏像の着衣を体験するワークショップにも老若男女の方が参加されました。着付けを体験する方と、それを興味津々と言った様子で見守る方々。写真を取り合ったり、お客様同士でも交流がありました。

いずれも展覧会を身近に感じていただくために企画したものでしたが、いかがでしたでしょうか？今後も幅広い年齢層の方が楽しめるイベントを考えていきたいと思います。

［広報　磯野 愛］

左から）声明公演、着衣体験ワークショップの様子

◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

［会員の特典］
○ 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
○ 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
○ ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
○ 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
○ 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員（大学・専門）	ファミリー会員（ご家族4名様まで）
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎ 編集後記

企画展「彫刻家・高村光太郎展」、首都圏では久しぶりの回顧展です。光太郎の詩、書をお好きな方には申し訳ないのですが、今回は彫刻にのみ焦点を当てたご紹介となります。日本近代彫刻を取り上げる展覧会が増えてきましたが、その中でも現存点数の少ない光太郎の作品をまとめて見られる機会はそう多くありません。この機会にぜひ彫刻家としての高村光太郎を再発見いただければ幸いです。また「花鳥風月」展では、久しぶりに江戸絵画をまとめてご堪能いただけます。こちらもお楽しみに！

（磯野 愛）

［開館時間］
10：00 -18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
［交通案内］
◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

［編集・発行］
千葉市美術館
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
［発行日］2013 年 6 月 27 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art